



TITLE:

京大広報 No. 582

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 582. 京大広報 2003, 582: 1527-1550

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196518>

RIGHT:



京大広報

No. 582

2003. 9

目次

〈大学の動き〉

- 受験生のための
「京都大学 オープンキャンパス2003」を開催… 1528
平成15年度「21世紀 COE プログラム」の
採択結果…1529

〈部局の動き〉

- 寄附講座「医薬品理論設計学講座」の設置…1530

〈保健コーナー〉

- みんなで精神保健 武本一美…1531

〈寸言〉

- 知の創造拠点 領木新一郎…1532

〈随想〉

- 新しい法曹養成制度の中での法科大学院と
これからの法学教育
名誉教授 奥田昌道…1533
京大に京舞が来た日
名誉教授 齊藤久美子…1534

〈洛書〉

- その土地ならではの人と文献、そして…
木津祐子…1535

〈文化交流〉

- 大学職員のアメリカ滞在記 内海知子…1536

〈日誌〉

- …1537

〈話題〉

- 高等教育研究開発推進機構、高等教育研究開発
推進センター及び全学共通教育棟の
披露式の開催…1538
田中耕一氏特別講義の開催…1538
遠山敦子文部科学大臣が
桂キャンパスを視察…1539

- 細田博之科学技術政策担当大臣が
吉田キャンパスを訪問…1540
2003 Japan-United States Joint Workshop
on Space Solar Power System (JUSPS'03)
…1540

- 原子炉実験所が臨界集合体実験装置(KUCA)を
用いた韓国の学生のための研修を実施…1541

- 〈計報〉…1542

〈資料〉

- 平成14年度予備的経費配分実績…1545
平成14年度歳入・歳出決算額
及び対前年度比較調…1545

〈公開講座〉

- ウイルス研究所学術講演会…1546
化学研究所公開講演会…1546
農学研究科附属農場創立75周年記念
第7回公開講座
「附属農場における研究の最先端」…1547

〈お知らせ〉

- 宇治キャンパス公開2003
—人類の生存基盤を探索する情報科学—…1548
農学部創立80周年記念シンポジウム
「人類の未来と農学の可能性」
—世界のフィールドから—…1549
フィールド科学教育研究センター
上賀茂試験地一般公開自然観察会
「晩秋の里山を楽しもう」…1549
原子炉実験所学術公開日について…1550

- 〈編集後記〉…1550



「京都大学オープンキャンパス2003」を開催
—関連記事 本文 1528 ページ—



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

受験生のための「京都大学 オープンキャンパス2003」を開催

受験生のためのオープンキャンパスが8月11日、12日の両日に開催され、高校生、保護者等を含め、全国各地から2日間で延べ約7千人が参加した。今回は昨年に引き続き2回目の開催となるもので、本学のエデュケーションの紹介及び入試、学生生活、就職などの各種相談等を通して、受験生に大学情報を発信する場であるとともに、受験生がいま何を考え、何に興味・関心があるのかを知ることでは情報を受信する場でもある。

1日目は京都市勧業館「みやこめッセ」を会場として、午前中に全体説明会が行われ、午後は相談コーナーが開設された。全体説明会では尾池和夫副学長の開会挨拶に続き、長尾 真総長の「京都大学を目指す諸君へ」と題した講演があり、桂キャンパスの展開に至るまでの京都大学の歩みと現状及び21世紀における京都大学の目標が語られた。その後、応援団による軽妙な掛け合いと力強い演舞が披露され、参加者から盛大な拍手が送られた。最後に在学生からのメッセージとして、文学研究科修士課程1回生の山本麻由さんと医学部5回生の川島雅央さん

が、自らの体験を熱く語った。相談コーナーでは教育研究や入試、学生生活、就職等の相談や質問に教職員や学生が対応した。

この他、大学キャンパスでは附属図書館見学や基礎物理学研究所（湯川記念館）、人文科学研究所附属漢字情報研究センター、学術情報メディアセンター（南館）などを巡るキャンパスツアーが行われ、参加者に好評であった。

2日目は大学キャンパスにおいて、学部説明会や附属図書館、総合博物館の見学が行われた。学部説明会では、模擬講義や講演、研究室訪問などが催された。法学部の説明会では、参加者から現在、社会的に注目を集めている法科大学院について多くの質問が寄せられた。また、医学部の説明会ではビデオによる最先端の医学・医療を紹介する講演が行われ、参加者は熱心に聞き入っていた。

オープンキャンパス開催中、参加者は、大学構内を散策したり、カフェレストラン「カンフォーラ」で食事をするなどして京都大学を満喫した。



平成15年度「21世紀COEプログラム」の採択結果

「21世紀COEプログラム」は、世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図ることを目的として、文部科学省が平成14年度から開始した事業である。全国の国公立大学から申請のあった計画は、日本学術振興会を中心に運営されている「21世紀COEプログラム委員会」において、各拠点の申請内容に係る研究教育活動のこれまでの実績や拠点を形成するための構想・計画等が提出書類及びヒアリングによって審査される。

京都大学では、各部局から計画を提案してもらい、計画の概要等を聞くためのヒアリングを実施するなどのプロセスを経て、平成14年度は、募集のあった

5分野について、15件の拠点形成計画を文部科学省へ申請し、5分野11件の計画が採択された。平成15年度は、新たに募集のあった5分野に対して、15件の計画を申請し、5分野、11件が採択された。この結果本学は、14年度に採択された11件と合わせて合計22の拠点を有し、全学を挙げて拠点形成計画（5年間）を推進していくこととなる。

なお、平成15年度に募集のあった5分野で採択された全件数は、56大学133件で、分野別の内訳は、「医学系」分野27大学35件、「数学、物理学、地球科学」分野15大学24件、「機械、土木、建築その他工学」18大学23件、「社会科学」分野14大学26件、「学際、複合、新領域」21大学25件となっている。

平成15年度「21世紀COEプログラム」の分野別採択一覧

分 野	分 科 名	申 請 部 局	プログラム名称	拠点リーダー
医学系 F (2)	基礎医学 F-1	医学研究科 医学部附属病院	病態解明を目指す基礎医学研究拠点 (多重遺伝子変異モデルによる病態解明)	(医学研究科) 本 庶 佑
	外科系臨床医学 F-2	医学研究科 医学部附属病院 再生医科学研究所	融合的移植再生治療を目指す国際 拠点形成	(医学研究科) 田 中 紘一
数 学, 物理学, 地球科学 G (3)	数 学 G-1	数理解析研究所 理学研究科	先端数学の国際拠点形成と次世代 研究者育成	(数理解析研究所) 柏 原 正樹
	物理学 G-2	理学研究科 附属天文台 基礎物理学研究所 化学研究所 国際融合創造センター	物理学の多様性と普遍性の探求拠点 (素核・物性・宇宙を統合して推 進する研究と教育)	(理学研究科) 小 山 勝二
	地球惑星科学 G-3	理学研究科 防災研究所 宙空電波科学研究センター	活地球圏の変動解明 (アジア・オセアニアから世界への発信)	(理学研究科) 余 田 成男
機械、土木、 建築学その他 工学 H (1)	機械工学 H-1	工学研究科 情報学研究科 国際融合創造センター	動的機能機械システムの数理モデル と設計論	(工学研究科) 土 屋 和雄
社会科学 I (2)	法 学 I-1	法学研究科	21世紀型法秩序形成プログラム	(法学研究科) 大 石 眞
	経済学 I-2	経済研究所 経済学研究科	先端経済分析のインターフェイス拠点の形成 (理論・応用・政策の創生と融合)	(経済研究所) 佐 和 隆光
学 際, 複 合, 新 領 域 J (3)	ゲノム科学 J-2	化学研究所 薬学研究科 医学部附属病院	ゲノム科学の知的情報基盤・研究 拠点形成	(化学研究所) 金 久 實
	生物分子科学 J-3	農学研究科	微生物機能の戦略的活用による生 産基盤拠点	(農学研究科) 清 水 昌
	人文社会情報学 J-4	人文科学研究所 人間・環境学研究科 東南アジア研究センター	東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 (漢字文化の全き継承と発展のために)	(人文科学研究所) 高 田 時雄

部局の動き

寄附講座「医薬品理論設計学講座」の設置

8月1日、大学院薬学研究科の寄附講座「医薬品理論設計学講座」が設置されることになった。

概要は次のとおりである。

- 1 部 局 名 薬学研究科
- 2 名 称 医薬品理論設計学講座
- 3 寄 附 者 藤沢薬品工業株式会社
代表取締役社長 青木 初夫
- 4 寄 附 金 額 総額250,000,000円（分割納付）
- 5 設 置 期 間 平成15年8月～平成20年7月
(5年間)
- 6 担 当 教 員
教授相当 北 浦 和 夫
助教授相当 中 西 功
助手相当 (公募)
- 7 研 究 目 的

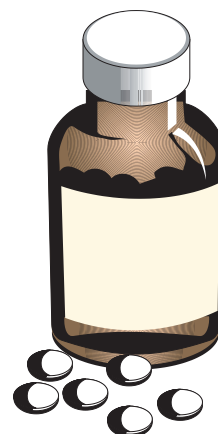
計算化学と構造生物学の融合による理論的分子設計学研究を行い、医薬品分子設計の新たな方法論を創出するとともに、実際の医薬品分子の設計とその創出への応用研究を推進することにより、迅速かつ効率的な創薬研究法の確立を目指す。

8 研究内容

量子化学計算や分子動力学計算などの理論化学計算を基盤として、現在問題となっているリガンドの親和性予測における計算精度の向上を図り、その結果をインシリコ・スクリーニングなどの医薬品探索における計算化学的取り組みへと応用する。

9 研究課題

- 1) リガンドの薬物受容体に対する親和性（活性値）の予測法の精度が実測値の実験誤差内に収まるレベルの新たな計算手法の開発を目指す。
- 2) 新たに開発した方法論を実際の創薬ターゲットの候補に適用し、構造と活性との相関を解析しながら、その有用性の検証を行うとともに、方法論の改良を図る。
- 3) 有効性の検証後、この方法論をさらに別の新規ターゲットタンパク質に適用し、新規リガンドの探索研究を行う。



保健コーナー

みんなで精神保健

武本 一美

近年、科学の興味と関心の対象が人間の脳に集まり、いわゆる精神病も、他の身体的な疾患と同様に脳機能の障害として生物学的に解明しようという試みが続けられている。解決は、まだ遙か彼方であろうが、以前と比べれば、ほの暗かった精神病という世界の見晴らしが幾分良くなってきたように思われる。



このまま脳科学の進歩が続き、やがては精神疾患も他の身体的疾患と全く同じに扱えるようになることを期待したいが、なかなか難しそうである。というのも、精神疾患という概念自体に、文化、倫理、価値、社会などの様々な文脈が組み込まれているからである。たとえ脳の機能が生物学的に完全に解明されても、精神疾患の特殊性が解消できるかどうかは、疑問であろう。

そのような特殊性の一つに、病識の欠如がある。身体疾患の場合は、手遅れになることはあっても、痛みや病苦から、いずれは自ら医師の門を叩くことになる。また、症状が無くとも、医師から病気であることを告げられたとき、そのことを否定する患者は稀であろう。つまり、ほとんどの場合、たいした抵抗も無く治療へ導入できる。ところが、一部の精神疾患では、自らの疾患を全く認識できなかったり、「何かおかしい」「苦しい」と感じながらも病気ではないと考えたりすることがある。個人任せでは、治療に繋がらない場合がでてくるのである。したがって、精神疾患においては、周囲のものが異変に気付いてやるのが、どうしても重要になる。精神保健は、みんなでやらないと効果が期待できないのである。

実際上も、一部の精神疾患は元来周囲のものが気付くようにできているし、周囲のものが手を差し伸べなければならないようにできている。身体疾患なら、人知れず癌になり、人知れず治療を受けるということも可能であろう。ところが、かなりの精神疾患は、人間関係の中で異常が明らかになる。哲学的

には難しい問題を含むのかもしれないが、例えば、一人で下宿にいるときだけ異常な行動をとり、人前では全く正常に振舞える学生がいたとすると、この学生は正常であると言うしかないのである。よって、一部とはいえ、ある精神疾患の病名がつく場合には、周囲の誰かが既にその人の異常に気付いてるのである。

では、ある人の異常に気付きながら、全員がその人を放置しておくことが出来るだろうか？多分、できないだろうと思う。何とかして治療に結び付けてあげられればとを感じるのが、自然だろう。私自身も、友人を救おうと奔走し、大学の保健診療所にやってくる学生たちに何度も会った。このようにして、精神疾患は誰にとっても他人事ではなくなるのである。

隣人愛の問題を離れても、組織の管理者にとって、精神保健は他人事ではなくなりつつある。社会状況の変化は、はっきり目には見えないにしろ急速である。以前は、全く個人の問題だと考えられていた精神疾患や自殺が、組織の責任に帰されるようになってきた。それ自体は喜ばしい変化なのかもしれないが、そうした責任関係が制度化されると、後は機械的な運用になってしまう。例えば、残業時間がある規定以上の状態で病気になったら、その病気と業務の関係が薄くとも自動的に労災認定がなされている。制度とは、一つの思考停止状態であるのだろう。ニュース等で御存知のように、ある自殺の事例に、労災認定があり、1億6千800万円の賠償金が支払われた。賠償金がこれだけになると、普通の中小企業は、倒産するだろう。来年から独立法人化するらしいが、我が京都大学は大丈夫であろうか？これが、現在多くの組織の管理者が、精神保健に意を注いでいる所以である。

では、みんなでどのような精神保健を実践して行けば良いだろうか？治療は、我々精神科医が責任を持って行なうとして、みなさんには、精神保健のために、何をどのようにご協力いただければよいだろうか？それは、・・・肝心の所で紙数が尽きてしまった。（たけもと かずみ 保健管理センター講師 専門は精神医学）

寸言

知の創造拠点

領木 新一郎

昨年、京都大学法学部の卒業生で組織されている「有信会」が全国組織の同窓会として発足することになり、僭越ながら私が、その初代会長を仰せつかった。

有信会は1921年に創設され、爾來80年以上にわたり、卒業生・教官・学生が互いに親しみ、信頼を深める、まさに“朋友信有る団体”として、有信会誌の発行や汎有信会大会の開催など行なってきた。国立大学法人法のもとで、来年度からは京都大学も法人化される。また、法学部では法科大学院が開設される。大きな変革期を迎え、母校は一段と厳しい大学間競争のもとにおかれることになる。法学部同窓生としても、学外から母校の発展を支援したいものである。まず卒業生に対する大学の近況等の情報発信を強化し、大学関係者と卒業生の交流を促進するなど、有信会の基盤を充実させていきたいと考えている。

さて、国立大学法人化の狙いは、大学の主体性を確立しつつ、社会との連携を深めようとするところにある。本来の役割である教育・研究を踏まえて、社会貢献をどのように実現していくかが大きい課題となる。もとより社会との関わりは基本的なことだが、それを法人化のなかでどのように実現するかが大切となる。

確かに大学は「大学の自治」の名にかくれて“象牙の塔”にこもり、社会に何らの成果も還元せず、一人よがりの教育や研究に時間と税金を費消しているようでは“大学のエゴ”と非難されても然るべきであろう。しかし、大学が、例えば企業や産業界のニーズに迎合する余り、短期的に成果のあがる研究や儲かる研究にのみ取り組むようになっては、大学の研究レベルの質の低下を招いたり、大学そのものの存在意義さえ失い兼ねないと思う。大学が果たすべき真の社会貢献とは一体何なのかを、今一度、



しっかりと考えておく必要がある。

私は、大学は“目先の社会貢献”のみにこだわるのではなく、あくまで基礎研究のような長期的視点に立った研究活動に邁進する「知の創造拠点」であって欲しいと願う。企業は採算の合うものしかやらないし、目先のものしかできない。企業でこなせない基礎研究や純粋学問を追求する—「知の創造拠点」であることこそ、大学が負うべき社会貢献の分野とも言えよう。とりわけ、京都大学のような言わば“研究型大学”においては、長期的視点からの基礎研究を重視し、そのような活動から、日本の産業のみならず、国際社会や人類の発展に資する大きな成果が生み出されることが期待されるのではないだろうか。

昨年、ノーベル賞を受賞された小柴昌俊先生がカミオカンデで成果を得るのには、20年以上の歳月がかかったと聞く。田中耕一さんも、長年にわたる試行錯誤の積み重ねから独創的な発見につながった。お二方の業績は基礎研究で育まれたものであるが、基礎研究においては、真に発見・開発という創造的成果が生まれるまでに、かなりの年数を必要とする。国立大学も昨今は、法人化を控えているためか、すぐに成果の出ない基礎研究の重要性を主張する声弱くなったように思える。我々産業界も、短期的な成果や効率性だけで大学の研究を判断するのではなく、長い目で大学を支援していく姿勢が肝要と思う。

京都大学は、これからも、持ち前の自由闊達な学風と、基礎研究や真理探究を重んじる伝統を失うことなく、新しい時代を切り拓く“知の創造”に励んでいただきたいと願っている。

(りょうき しんいちろう 大阪ガス株式会社相談役 昭和29年法学部卒業)

随想

新しい法曹養成制度の中での
法科大学院とこれからの法学教育

名誉教授 奥田 昌道

近時急ピッチで進められた司法制度改革の中での法科大学院構想は、これまでの大学法学部および法学教育にとって、その在り方を根底から揺るがすほどの大変革を迫るものと言ってよいであろう。これまで法学部において六法科目を担当する教員は解決しがたいジレンマに悩み続けてきた。それは法学部における法学教育の目標をどこに設定すればよいのかという点であった。法学部は法曹養成を直接の目的とする教育機関ではなく、法曹志望者を含みつつ法曹以外の分野に進みたい人たちをも対象として、いわばジェネラリストを育む場として、広く法学および政治学を履修させることを目的としてきた。法曹志望者にとっての難関は言うまでもなく司法試験であるが、法学部の授業は司法試験合格を目的とはしていない。六法科目の中でも量的にも質的にも難度の高い民法について言えば、私が携わった長年の経験からしても、司法試験を目指す学生たちに標準を定めた授業をすれば、それ以外の学生はついてきてくれないし、多数の学生がついてきてくれるような授業であれば司法試験受験者層には不満が残るといって有様であった。さらに、大学での授業の質や程度の如何にかかわらず、司法試験受験予備校に通わなければ合格は困難だという風潮が蔓延し、学生の大学離れが急速に進んだ。予備校では、いかに効率よく最短距離で合格できるかの知恵や受験技術を教える反面、原理原則を重んじ根本からじっくりと法的問題を考え、多様なものの見方、柔軟な法的思考力を養うといった法学教育の中で最も大切にしなければならない要素が受験には有害なものとして切り捨てられる。わが国の法曹人口が先進諸国のそれに比べて著しく少ないことは、共通の認識となつてはいるものの、上に述べた状況のもとで、ただ司法試験の合格者を増やし、司法研修所の収容能力を最大



限に拡大することによって法曹人口増への要請に応ずることは適切な解決策とは成り得ない。

司法制度改革の中の重要な柱として、新しい法曹養成制度の中に位置付けられた法科大学院は、法曹養成に特化した実践的な教育を行う大学院として司法制度改革審議会によって提言されたものであり、これを受けた「法科大学院の教育と司法試験等との連携等に関する法律」によれば、法科大学院は法曹養成のための中核的な教育機関とされ、少人数による密度の高い授業により、将来の法曹としての実務に必要な学識およびその应用能力並びに法律に関する実務の基礎的素養を涵養するための理論的かつ実践的な教育を体系的に実施するものとされている。かくして先に述べた六法科目担当教員の抱えていたジレンマは解消されることとなるのであるが、それでは従来の法学部とそこでの法学教育はどうなるのであろうか。法科大学院の発足当初においては、法学部の出身者とそれ以外の者（法学未修者）との比率は概ね2対1くらいが望ましいとされているが、将来的には法学部は廃止して法科大学院は法学未修者によって占められるのが望ましいとする意見も散見される。

法科大学院の創設により、法科大学院と法学部における法学教育との役割分担は当然に要請され、法学部における法学教育の在り方（年限も含めて）が検討されるべきは当然であるが、法曹以外の有為の人材を社会に輩出してきた法学部の役割と存在理由は決して過小評価されてはならないと私は考えている。法曹養成を目的とし、かつ理論と実務との架橋を目指す法科大学院の創設を新しい試みとして積極的に評価するとともに、新しい法学部の在り方を模索し、両者が共存共栄しうる道を見出してほしいものと切望する次第である。

（おくだ まさみち 元法学研究科教授 平成8年退官、専門は民法）

京大に京舞が来た日

名誉教授 齋藤 久美子

臨床心理学専攻の私は、心と心の相互作用の問題に今尚実践的に取り組んでいます、よくわからないことや不思議なことが多く、容易な課題はありません。いつどういうことに出くわすかわからず、何に傷ついたり、また感動したり支えられたりする、偶発性や意外性だらけの心だけに。



私はまだ女子学生がほんの一握りしか居ない頃の京大生でした。自分ではそのことを格別意識していなかった筈が、どうやら勝手の違う、居心地の定まらない場に居る思いがどこかにあったのか、ほんとうはあまり落ち着かない心地でいたかと思います。すべては後で思い至ることなのですが、まず一つ、入学当初に京大時計台玄関の上に刻んである、モダンな飛天彫像を見た時の何とも言えない安堵が思い出されます。流麗に飛翔する女性像に、一瞬にしてこちらの心がうるおい、解放される気分になりました。おかしいことに、「京大ってきっと乙ないい所なんだ！」というふうに、思いが早速汎化して勝手に嬉しくなっていたのを思い出します。

明るくてきれいだった高校の校舎とは違う、どことなく殺風景で重々しい空間に違和感があって、何か自分とシンクロするものを探していたのかも知れません。

そしてもう一つ、二回生の頃に法経大教室で行われた京舞の催しがありました。舞手は四世井上流家元の井上八千代（現在井上愛子）で演目は「海士」、確か開演の辞は多田道太郎先生が述べられたように記憶します。通りすがりにもらった整理券を持って大教室に入ると、教壇に金屏風でにわか舞台が設けられ、囃子方の席の具合が記憶にないのですが、まさかテープ演奏ではなかったと思います。とにかく舞台は控え目でかわいらしく、大教室とは釣り合いようもないものでした。そして、小柄な舞主が左手に現れました。彼女がチグハグな場の様子には何の

頓着もなく、すべてあたり前のように、いきなり舞の世界の真只中の存在として立ち現れたのには目を奪われました。この瞬間に教室はもはや教室ではなくなったと思います。「海士」には厳しく激しい内容が盛り込まれており、女性が強い生命力を発揮してひたむきに難関に立ち向かうテーマのものながら、鍛え抜かれたアクロバティックな技芸にも力みはなく、自然な柔らかさが生地になって全体を貫いているのが何とも印象的でした。

観客に見せるという姿勢とは異質の、何と云うか、舞の世界の本源の方にぐっと引いた位置から発しているような一つ一つの動きは、観客への強要や迎合とは無縁の、自然な解放の効果を生んでいました。「私はこのように舞い遊んでいるところですが、皆さんはどうぞ随意に」と言うところでしょうか。勿論ほどほどをやっているのではなく、大へんな集中力で、振りの一つ一つに舞の世界の真情が刻み込まれて行くものでしたが、その密度は人を圧迫したりはせず、逆に私の心身の隅々までを深呼吸させてくれるように感じられて、本当に不思議でした。生命力に満ちた大らかな自然、そこから湧き出る瑞々しい一瞬一瞬を忘れることはないと思います。

思わず長々と言葉を連ねてしまいましたが、この舞の精のような存在は、体感的に私の中に残り続けており、専門領域の仕事においても、人と人の通い合いや響き合いについて貴重な問いを投げかけ続けてくれています。

「自由な学風」の京大が、よく唱われてきましたが、“放ったらかし”の代名詞のようなこの言い方も、本当のところは、この舞のような、磨き抜かれた自由、また容量の大きい自然な自律性のことをメッセージしようとしたのではなかったのか、そんな風にも思えてくるのです。

（さいとう くみこ 元教育学研究科教授、平成11年退官、専門は臨床心理学）

洛書

その土地ならではの人と文献、
そして・・・

木津 祐子



飛行機が着陸態勢に入ると、「まっ青」などの言葉では言い尽くせない珊瑚の海が目に見え、滑走路脇の風に揺れるデイゴの枝を眺めながらトラップを降りると、強烈な既視感に襲われた。台北、泉州、昆明……、ここはどこだろう？ぼんやり考えているうちに、もう身は南国の空気の中。石垣島との最初の出会である。

石垣島には、四年間、夏休みや春休みを使って通い続けている。琉球における官話（明清期の中国で役人や商人が用いていた一種の共通語）使用に関する調査の一環で、石垣市立八重山博物館に所蔵される官話教科書『百姓』の写本二種を閲覧するのが最初の目的であった。ちなみに『百姓』とは、十八世紀中葉に漂着した中国山東省の商人白世雲と琉球久米村通事との会話記録、京大にも別系統の写本はあるが、どこで筆写されたものかわからない。一方、八重山博物館のそれは、筆写された場所にそのまま残る貴重なテキストである。それを現地で読んでみたい。これが訪問の第一の動機であった。

かつて琉球王国には、久米村士族（クニンダー）という対中国外交を専門に扱う職掌集団があった。これは明の洪武帝が、琉球外交の水先案内として福建から琉球に移住させたと伝えられる「閩人三十六姓」にルーツをもつ（但し、琉球人を久米村籍へ編入する政策も何度かとられている）。彼らは正規の通訳として中国福州や北京に赴く以外に、語学留学の為に福州に滞在することもあり、各種の官話教科書を独自に編纂していた。残念なことに太平洋戦争末期の猛烈な地上砲撃によって、那覇に残されていたテキストは多くの尊い人命とともに灰燼に帰ってしまったのだが、琉球の他の島には、それらの写本の一部が今に伝わっている。特に、中国福建との航路を行き交う朝貢船や冊封船が寄港し、また東アジア各地の船がしばしば漂着した八重山では、官話学習が広く奨励され、久米村への内地留学も行われていた。『百姓』などの久米村の官話教科書や外交ハンドブックの類が筆写され伝わったのも、そのためであった。

さて、念願の『百姓』の新旧二種の写本を閲覧していた時のこと、光緒四年（1878年）の日付けをもつ数枚綴りの札記が、写本とともに出て来た。「官話」と表題がつけられたその札記は学習の為の覚え書きで、作成者は松茂氏當能、八重山博物館蔵『百姓』の一本を同治十三年（1874年）に筆写した人物である。そこに、大きな字で「学生痴長十五歳（私は十五歳になります）」という『百姓』の一フレーズが書き付けられているのが目にとまった。

この當能が官話を学びはじめたきっかけに興味を覚え、やはり博物館に所蔵される『松茂氏系圖家譜』に當能の記録を探てみると、彼が元服後最初に就いた任務が、石垣島に漂着した中国商人の身の世話であったことが判明した。彼が十五歳の時のことである。そしてそのことが、當能を官話学習に向かわせた。「官話」の札記を作った時にはすでに壮年に近づいていた當能が、もはや使いようのない「私は十五歳です」という中国語を書き留めている。中国人の側にいながらも、思うように会話を交せなかった十五歳の當能少年が、私には一瞬そこに立ち現れたかのように思われた。

ある文献から他の文献へ、あたかも人と人との繋がりのように書物の連鎖が起こる、これは文献渉猟の大きな喜びの一つである。特に地域との結びつきが強い資料では、現地で資料を手にとると、文字がまるで生き物のように動き始め、見えない力で書物に引き寄せられることがある。このドキドキする楽しみを一度知ると、もう止まらない。文献はできることなら書かれた土地で読みたいと日頃から思い、いま沖縄に通うのも、このような禁断の果実の味を知ってしまったからに他ならない。ちなみに、私はその後八重山士族の家譜に記された官話記事を調査することになるが、これも當能少年と遭遇したお蔭であろうか。

果実と言うと、博物館でおやつに頂戴したドラゴンフルーツはおいしかった。えんじ色の皮の弾力と果肉のみずみずしさが素晴らしい。つややかなゴーヤーの甘い苦みも大きな驚きであった。その土地ならではの食べ物のおいしさ、これももしかすると石垣島へ通う理由の一つかもしれない。

（きづ ゆうこ 文学研究科助教授）

文化交流

大学職員のアメリカ滞在記

内海 知子

私は文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラムに参加する機会を得、昨年6月より約1年間アメリカで過ごすことができました。この研修は英語力向上とアメリカの大学における国際交流事業について学ぶことを目的に、全国の国立大学・研究所から職員が参加します。昨年度参加者は13名でした。前半6月から12月までは13名全員でモンタナ州立大学において、語学研修とアメリカ高等教育機関・教育制度について講義を受けました。後半1月から5月までは13名が全米各地の大学のStudy Abroad Office等でインターンを行いました。私は京都大学と協定校であるイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校にて後半を過ごしました。

アメリカ北西部にあるモンタナは別名Big Sky Countryとも呼ばれており、その名のとおりどこまでも続く青い空とロッキー山脈に囲まれたボーズマンにモンタナ州立大学があります。ボーズマンは人口約3万人、学生数が約11,000人という小さな大学町です。留学生は約300名在籍しています。その小さな大学町ですが、留学生に対するサービスは学べきものがありました。その1つがボランティアの存在です。ある人は留学生のために様々なアクティビティを企画したり、また週に一度コーヒーアワーを開催してくれました。このコーヒーアワーというのは、留学生とアメリカ人の学生がお茶を飲みながらおしゃべりをする会です。まだ英語が



モンタナのホストファミリーと

上手でない私にとって、アメリカ人の学生と友達になるのはなかなか大変です。そんな留学生のために「カンバセーションパートナー」という制度がありました。これは自分の年齢や趣味などの希望を書いて提出すると、その趣味や年齢にあったネイティブのパートナーを見つけてくれ、1週間に一度お茶を飲んだり、遊びに行ったりします。恋の話、宗教の話などアメリカ人学生の話聞ける貴重な体験でした。外国で一人暮らす留学生にとって孤独をどのように克服していくのかが大事です。アメリカでは前述のように留学生のためにボランティアをしてくださる人がいます。こういう人たちによって留学生は支えられているんだということをモンタナでは学びました。

後半イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校は大学の雰囲気モンタナとがらりと変わりました。山ではなく一面とうもろこし畑。五大湖からの寒風が吹き荒れ、マイナス10度の世界を体験しました。イリノイ大学は学生数約35,000人、そのうち留学生が約4,500人とアメリカでも大変大きな大学です。私はStudy Abroad Officeでサマープログラムのお手伝いをしました。ただインターン以外にも様々なオフィスにインタビューする機会があり、私はイリノイ大学でアメリカが抱える問題を垣間見ることとなりました。アメリカはテロ以降国際交流が大事であるという認識が高まったそうです。ただその反面ビザ取得が以前より困難になる等留学生に対して厳しくなっています。現にイリノイ大学にも、いったんアメリカを出国するとビザが取得できず、アメリカに戻ってこれない留学生が数名いました。アメリカは世界中から人が集まるインターナショナルな国と思っていた私は大変驚きました。しかし学べきこともたくさんありました。まずは配偶者に対するケアです。アメリカの大学院に留学する学生のほとんどが結婚しており、配偶者を伴って渡米してきます。イリノイ大学では配偶者のためのオリエンテーション、また1ヶ月に一度コーヒーアワーが開催され、



イリノイ大学キャンパス。ペリー来航150周年を記念して行われた Japan Night にて浴衣を着て花笠音頭を踊る。

配偶者が守るべきビザ等の法律的な知識を教えたり、様々な悩みを聞く機会を設けていました。またボランティアで配偶者のために英語を教えてくれる団体をサポートし、授業を行うための場所を提供していました。このようにイリノイ大学ではボランティア団体とうまく連携し、配偶者の方が孤独にならないよういろいろな取り組みが行われてました。次に留学生に対するケアについてですが、イリノイ大学に

は Buddy Program というプログラムがあります。これは留学から帰ってきた学生とイリノイ大学の留学生を引き合わせるプログラムです。これは帰国し留学先の言葉を忘れてしまうと不安になっているイリノイ大学の学生とアメリカに来て大変な留学生双方にメリットがあるとのことでした。この他にも Student Diploma という学生がスケート・飲み会等留学生のために企画・実行するという制度もありました。このように私は普通の留学では体験できないアメリカにおける留学生を取り巻く環境、そして留学生・またその配偶者の方のためのサポートシステムを学ぶことができました。

私はアメリカの大学が絶対いいとは言いません。ただ日本の大学が見習わなければならないことが多々あると思います。今はアメリカで学んだことを少しでも還元できるよう頑張りたいと思ってます。最後にこの貴重な機会を与えてくださった京都大学に本当に感謝しております。

(うつみ ともこ 研究協力部国際交流課職員)

日誌 2003.6.1 ~ 7.31

6月3日 評議会
大学院審議会
5日 人権問題対策委員会
9日 学生部委員会
10日 セクシャルハラスメント窓口相談員
のための研修会
13日 入学者選抜方法研究委員会
17日 創立記念行事音楽会
18日 創立記念式
名誉教授懇談会
国際交流委員会
20日 同和・人権問題委員会
24日 評議会
大学院審議会
27日 スウェーデン大使館 Lennart Stenberg
科学技術参事官来学、総長他と懇談

7月1日 保健安全関係委員会委員長懇談会
8日 評議会
大学院審議会
14日 学生部委員会
16日 国際交流委員会
22日 評議会
大学評価委員会
大学入試センター試験実施委員会
25日 運営諮問会議
30日 附属図書館商議会
環境保全委員会

話題

高等教育研究開発推進機構、高等教育研究開発推進センター
及び全学共通教育棟の披露式の開催

本年4月に発足した高等教育研究開発推進機構及び高等教育研究開発推進センターの披露式が、8月12日（火）に、長尾 真総長、尾池和夫副学長、金田章裕副学長、塩田浩平総長補佐、西本清一総長補佐、本間政雄事務局長をはじめ部局長及び学内関係者の多数の出席を得て、本年3月に完成した全学共通教育棟の披露式と併せて、全学共通教育棟地階ホールにおいて開催された。

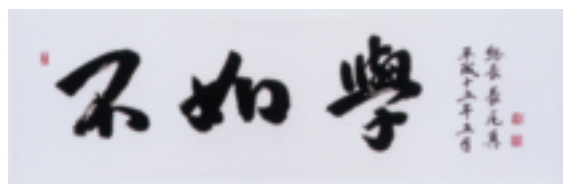
披露式では、赤岡 功初代機構長の挨拶に始まり、長尾総長の全学共通教育の重要性及び機構への期待、金田副学長の総合人間学部構内を「吉田南構内」へと名称変更された経緯・由来等を交えた挨拶が、それぞれ行われた。

引き続き、全学共通教育棟地階ホールに上掲された長尾総長による揮毫「不如學（まなぶにしかず）」のレプリカの除幕式が執り行われ、長尾総長から揮

毫するに至った経緯等の説明があった。

その後、全学共通教育棟の見学会があり、「不如學」のオリジナルが上掲されている機構長室、LL教室、授業準備室、リフレッシュコーナー等が、出席者へ披露された。

これらの披露式終了後、吉田南構内の生協吉田食堂において披露パーティーが催され、尾池副学長の機構への要望等を交えた祝辞に続いて、本間事務局長による乾杯の発声の後、終始和やかに関係者による懇談が行われた。



機構長室に掲げられた「不如學」

田中耕一氏特別講義の開催

7月3日（木）午後1時半から、農学部総合館W100講義室において、国際融合創造センター主催による田中耕一氏（2002年ノーベル化学賞受賞者、株式会社島津製作所フェロー、同センター客員教

授）の特別講義「ソフトレーザー脱離イオン化の起源と発展」が行われた。松重和美同センター長並びに長尾 真総長の挨拶の後、1時間半にわたる講義を本学教職員及び学生約360人が熱心に受講した。

同氏は、ノーベル賞受賞の対象となった質量分析における高分子のレーザー脱離イオン化法について詳細に解説するとともに、画期的な発見をするためには偶然起こったことを見逃さないこと、研究開発には0を1にする段階だけでなく、1を1,000にする段階とそれらを達成するためのチームワーク、すべてが大事であることを強調した。講義終了後、受講者との質疑応答も行われた。同講義の映像は学内LANを通じて中継され、講義室外でも約360名が受講した。



遠山敦子文部科学大臣が桂キャンパスを視察

遠山敦子文部科学大臣は8月7日（木）に本学を訪問し、長尾 真総長ら本学関係者と懇談するとともに、現在、建設が進められ、一部の建物が完成し移転が始まった桂キャンパスを視察した。

遠山大臣は、長尾総長から、この新キャンパスが目指すものは、「技術」、「地域」、「自然」が高度に融合・交流し、21世紀において工学研究科、情報学研究科が要請される諸課題に答え得る環境を創造すること、即ち Technology と Science が融合する『テクノサイエンス・ヒル』の形成であるとの説明を受けた。

懇談後、遠山大臣は西本清一総長補佐らの案内で、移転が完了し研究活動を始めている A クラスター

（電気系、化学系）の研究室、共同機器分析室、EMセンター管理室などを精力的に視察した。研究室の実験ラボでは、実験中の大学院生の説明に対して専門的な質問をするなど熱心に聞き入っていた。

また、高台にあり京都市内が一望できる B クラスターの事務管理棟3階の「桂ラウンジ」では、辻文三工学研究科長らから、同キャンパスの模型を見ながら、現在の工事の進捗、移転状況等の説明を受けた。

この後、桂インテックセンターを訪れ、音響実験のためのテクノメディア無響室やシステムシミュレーションラボをまわり、担当教官から構造物破壊実験の概要等の説明を受けた。



工事の進捗状況の説明を受ける遠山大臣



桂インテックセンターで研究概要の説明を受ける遠山大臣

細田博之科学技術政策担当大臣が吉田キャンパスを訪問

細田博之科学技術政策担当大臣が8月27日（水）に吉田キャンパスを訪問し、本学施設を視察した。

細田大臣は、長尾 真総長、佐々木丞平附属図書館長、松重和美国国際融合創造センター長、本間政雄事務局長から本学の先端領域的研究、次世代技術開発、産学共同研究の取り組み状況、総合博物館の研究標本や附属図書館（電子図書館）における貴重資料映像等のデータベース化などについて説明を受けた後、産学協同や我が国の図書館や公文書館の連携協力の在り方について意見交換を行った。

懇談後、細田大臣は長尾総長らの案内で附属図書館を訪れ、同館が所蔵する「今昔物語（国宝）」、「万葉集（重文）」、「お伽草子」を視察。佐々木附属図



「今昔物語」について説明を受ける細田大臣



電子顕微鏡でE S細胞を確認する細田大臣
書館長から各資料について説明を受けるとともに、その保存の良さや色の美しさに感心し、保存や修復方法などについても詳しい説明を受けた。

この後、細田大臣は、再生医科学研究所を訪問し、中辻憲夫所長から「ヒトE S細胞」の樹立に国内で初めて成功したこと、このE S細胞を全国の研究者に無償で提供することにより再生医療、難病治療への研究が大きく進展することなどについて説明を受けた。また、中辻所長の案内で実験室を視察し、樹立された「ヒトE S細胞」を電子顕微鏡で確認した細田大臣は、今後の研究の進展に大いに期待すると述べた。

2003 Japan-United States Joint Workshop on Space Solar Power System (JUSPS'03)

京都大学では、アメリカUCLAと協力し、JUSPS'03国際シンポジウムを2003年7月3日、4日に実施した。本シンポジウムは宙空電波科学研究センター松本 紘教授とUCLA Tatsuo Itoh教授が中心となり、日米の情報交換を目的に行われたものである。このシンポジウムはこれまで本研究センターが実施してきた京都大学SPSシンポジウムの第3回目を兼ねており、宇宙太陽発電所SPS及びその基幹技術であるマイクロ波エネルギー伝送技術に関するものである。当日は長尾 真総長はじめ、間宮馨文部科学審議官、茅陽一東京大学名誉教授以下、日米136名の参加があり、2日間でState-of-the-Art



長尾 真総長

Reviews 2 件, 口頭発表20件, ポスター発表17件 (うち 4 件展示) の発表が行われた。参加者のうち学生は41名を越え, 次世代を担う研究者の教育効果も大きいものであった。

本学からは工学研究科, 理学研究科, 情報学研究科, 農学研究科, エネルギー科学研究科, 木質科学研究所, エネルギー理工学研究所, 経済研究所等の参加を得た。本シンポジウムは京都大学他, アメリカの NSF (National Science Foundation), 京都大学



間宮 馨文部科学審議官



会場の様子

21世紀 COE「環境調和型エネルギーの研究教育拠点形成」の支援を受け, 実施されたものである。現在, 日米で SPS の研究機運が高まっており, 発表された内容に対し盛んな質問, 討論がなされ, 研究者の関心の高さを実感した。今後は日米の協力体制を維持, 発展していくことを目指し, 研究者間, 大学間の連携を深めていくことが合意された。

JUSPS ホームページ:

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/jusps/>

原子炉実験所が臨界集合体実験装置 (KUCA) を用いた 韓国の学生のための実習を実施

原子炉実験所と韓国の慶熙 (キョンヒ) 大 schools との学術交流協定を締結したことに基づき, 7 月 28 日から 8 月 9 日の約 2 週間, 韓国の原子力関連学科に所属する 4 回生 (学生13名, 引率教官 2 名) を対象とした初めての学生実習を原子炉実験所の臨界集合体実験装置 (KUCA) を用いて行った。

実習内容はこれまで本学の 4 回生を対象として行ってきたものとほぼ同じで, 臨界近接実験など原子炉物理学に関する基礎実験と原子炉の運転実習等である。英語による保安教育や実験内容の講義等を行った後に実験を行った。ほとんどの学生にとって初めての海外生活で, しかも英語での講義であったため最初はかなり緊張していたが, 次第に実験にも慣れてきて全員実験レポートを提出して無事に終了した。

今回, 短期間の交流ではあったが, 参加した学生



からは, 実験のみでなく教官との意見交換を通じて, 互いに近い文化の一端にも触れることができ, 大変有意義であったとの感想が述べられていた。

また, 同行した政府関係者から, この学生実習を来年度以降も引き続き受け入れてほしいとの要請があり, 本実験所としても更に充実・発展させる意向であることを表明した。

訃報

このたび、^{みずの まさお}水野政夫名誉教授、^{ごうだ たけし}合田 健名誉教授、^{なみかわ きよし}並河 澄名誉教授、^{ほりえ のぶお}聖江誠夫名誉教授、^{あんどうていいち}安藤貞一名誉教授、^{はだ ひろし}羽田 宏名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

水野 政夫 名誉教授



水野政夫先生は、6月24日逝去された。享年79。

先生は、昭和21年大阪帝国大学工学部冶金学科を卒業後、大阪大学講師および同大学助教授を経て、同39年京都大学工学部教授に就任、溶接工学講座を担当された。昭和62年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和63年より平成4年まで京都職業能力開発短期大学校長を務められた。

先生は、溶接の基礎研究に一貫して携わられ、その中でもアルミニウム合金構造物の溶接に関しては

草分け的な存在であり、この分野で数多くの研究業績を挙げられた。特にアルミニウム合金の溶接部の気孔の評価法を確立され、その発生機構を解明された業績は世界的な評価を得ている。

また、溶接学会理事、軽金属学会理事、日本金属学会評議員、同学会関西支部理事等の学協会の大要職を歴任されただけでなく、溶接技術検定委員として溶接技術の資格認定や雇用促進についても社会的貢献をされた。

これらの一連の研究教育活動、学会活動により、昭和62年に藍綬褒章、平成12年には勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

合田 健 名誉教授



合田 健先生は、7月7日逝去された。享年77。

先生は、昭和22年京都帝国大学工学部土木工学科を卒業、同大学工学部講師、助教授を経て、同35年教授に就任、同50年までの間、工学部衛生工学科衛生工学講座、水道工学講座および水質工学講座を担当された。昭和50年4月環境庁国立公害研究所水質土壌環境部長に転出後は、厚生省国立公衆衛生院衛生工学部長、摂南大学教授・工学部長および立命館大学教授を務められた。この間、平成元年に京都大学名誉教授の称

号を受けられた。

先生は、水質工学の分野、特に水道施設の水理と水質、河川・湖沼の水質特性と予測、下廃水処理、環境過程の熱力学的特性などに関する研究で多くの業績を挙げられ、「水質工学」などの著書を出版された。これらは水質工学を体系づけるものとして高く評価されている。また、土木学会環境工学委員長、水質汚濁研究協会会長、瀬戸内海研究会議会長、国際湖沼環境委員会副理事長、国際エメックスセンター科学政策委員会委員長などを歴任された。

(大学院工学研究科)

並河 澄 名誉教授

並河 澄先生は、7月12日逝去された。享年72。

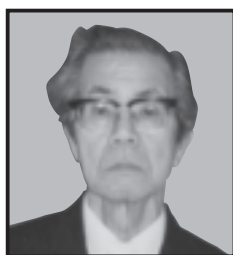
先生は、昭和28年京都大学農学部農学科を卒業、同大学農学部助手、講師、助教授を経て同48年教授に就任、家畜育種学講座を担当された。昭和63年に退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和55年3月から同59年2月まで附属牧場長として、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和63年4月から平成9年6月まで(社)全国和牛登録協会専務理事、会長を務められた。

先生は肉牛生産、なかでも産肉生理に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、畜産学の分野において多大の貢献をされた。

また、農林水産省畜産振興審議会、日本食肉格付協会牛枝肉部分肉部会、家畜改良事業団改良委員会、日本畜産学会関西支部などにおいて特別委員、部長、委員、副支部長等の要職を歴任された。

(大学院農学研究科)

塹江 誠夫 名誉教授

塹江誠夫先生は、7月24日逝去された。享年87。

先生は、昭和14年京都帝国大学理学部数学科を卒業後、旧関東州の公立学校教諭、旅順工科大学予科教授、帰国後九州帝国大学工学部助教授、京都大学吉田分校助教授を経て、同35年教授に就任された。同55年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和55年から同57年まで甲南大学教授、その後同63年まで岡山理科大学教授として、引き続き教鞭をとられた。

先生の専門は微分幾何学で、局所理論から大域理論へという世界的な研究の流れの中で、射影微分幾何学、ホロノミー群、連続変換群の群空間等の研究で顕著な成果を挙げられた。教育の面では新制大学の発足に伴う、旧教養課程の数学カリキュラムの編成、改善に尽力されるとともに、各種の教科書・参考書の執筆により数学教育に貢献された。

これら一連の功績により平成2年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

(総合人間学部・人間・環境学研究科)

安藤 貞一 名誉教授

安藤貞一先生は、7月26日逝去された。享年80。

先生は、昭和20年京都帝国大学工学部工業化学科を卒業、同大学大学院で学ばれた後、京都大学工学部助手、同講師、

同助教授を経て、同50年教授に就任、工業化学科工業分析化学講座を担当された。昭和61年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和58年より同60年まで環境保全センター長として、その管理運営に貢献された。

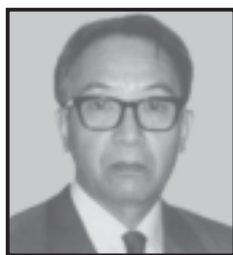
本学退官後は、昭和62年より平成10年まで岡山商科大学商学部教授を務められ、同大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、工業分析化学、特にクロマトグラフィー分野で配位子交換クロマトグラフィーやミセル動電

クロマトグラフィーなどの新規分離手法を開発され、優れた研究業績を残された。また、有機フッ素化学分野においては、わが国における同分野の創生期から幅広く研究を行われ、数々の新規合成法を確立されるなど独創性の高い研究業績を残された。さらに、品質管理分野においても、活潑な執筆活動を通じて、わが国の工業界における品質管理の普及と発展に多大の貢献をされ、昭和42年日経品質管理文献賞、昭和46年デミング賞本賞を受賞された。昭和51年に第8回フッ素化学国際会議事務局長を、また昭和51年より同53年および同61年より同63年に日本品質管理学会理事を務められた。

これら一連の研究教育活動ならびに学界活動における業績に対して、平成11年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

羽田 宏 名誉教授

羽田 宏先生は、8月6日逝去された。享年75。

先生は、昭和28年京都大学工学部工業化学科を卒業、同大学工学部助手、講師、助教授を経て、同47年教授に就任、

工業化学科工業物理化学講座を担当された。平成3年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、我が国の写真感光理論の先導者として多くの優れた研究業績を残されるとともに、我が国における写真工業の隆盛を担った多数の人材を育てられた。さらに半導体光化学、高分子金属塩の光化学及び色素凝集体の光化学等、広く不均一光化学の分

野を統合して固体表面光化学という新しい学問分野を創設され、この分野の発展に先駆的かつ指導的な役割を果たされた。学外においては(社)日本写真学会副会長、同西部支部長の他、永年にわたり同学会の運営委員、理事、さらには光化学協会役員、日本学術振興会の委員を歴任され、関連学協会 of 発展や後進の育成に多大な貢献をされた。

これら先生の優れた研究業績や功績は国内外で高く評価され、(社)日本写真学会技術賞、同功績賞ならびに同名誉賞、アメリカ画像科学・技術協会論文賞、同フェローシップ賞など数多くの賞を受賞された。

(大学院工学研究科)

資料

平成14年度予備の経費配分実績

(職員旅費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	6,793 千円	2. 配 分 額	6,793 千円
当 初 財 源	2,726	(1) 特 別 事 業 旅 費	5,991
欠員充員分より繰入	4,067	(2) 入 学 試 験 経 費	802

(校 費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	283,651 千円	(3) 入 学 試 験 経 費	36,487 千円
当 初 財 源	267,279	(4) 本 部 運 営 費	138,874
欠員充員分より繰入	16,372	(5) 管 理 運 営 費	45,395
2. 配 分 額	283,651	庁舎等管理運営費	31,395
(1) 継 年 的 補 足 経 費	24,650	施 設 等 整 備	14,000
(2) 教 育 研 究 経 費	38,245		
教育研究用図書整備	2,306		
教育研究用事業費	35,939		

平成14年度歳入・歳出決算額及び対前年度比較調

(文部科学省所管国立学校特別会計)

区 分	平成14年度決算額	平成13年度決算額	比較増△減額	増△減率
歳 入	円	円	円	%
附 属 病 院 収 入	21,742,572,066	21,841,560,046	△ 98,987,980	△ 0.45
授 業 料 及 入 学 検 定 料	11,779,632,050	11,381,993,800	397,638,250	3.49
学 校 財 産 処 分 収 入	249,585,200	25,344,000	224,241,200	884.79
産 学 連 携 等 研 究 収 入	7,501,054,496	5,803,732,985	1,697,321,511	29.25
雑 収 入	5,174,056,422	3,500,104,890	1,673,951,532	47.83
合 計	46,446,900,234	42,552,735,721	3,894,164,513	9.15
歳 出				
国 立 学 校	56,108,059,111	55,323,977,659	784,081,452	1.42
人 件 費	35,527,797,934	36,355,757,989	△ 827,960,055	△ 2.28
物 件 費	20,580,261,177	18,968,219,670	1,612,041,507	8.5
大 学 附 属 病 院	23,574,765,286	24,417,538,706	△ 842,773,420	△ 3.45
人 件 費	9,327,442,590	9,360,519,501	△ 33,076,911	△ 0.35
物 件 費	14,247,322,696	15,057,019,205	△ 809,696,509	△ 5.38
研 究 所	14,095,298,978	14,732,810,907	△ 637,511,929	△ 4.33
人 件 費	8,112,128,756	8,652,376,089	△ 540,247,333	△ 6.24
物 件 費	5,983,170,222	6,080,434,818	△ 97,264,596	△ 1.60
産 学 連 携 等 研 究 費				
物 件 費	7,117,998,173	5,646,062,596	1,471,935,577	26.07
施 設 整 備 費	17,782,566,560	21,971,582,035	△ 4,189,015,475	△ 19.07
物 件 費	146,666,000	2,733,598,000	△ 2,586,932,000	△ 94.63
施 設 費	17,635,900,560	19,237,984,035	△ 1,602,083,475	△ 8.33
※改革推進公共投資施設整備費	10,957,662,730	889,370,880	10,068,291,850	1132.07
物 件 費	2,454,923,000	0	2,454,923,000	—
施 設 費	8,502,739,730	889,370,880	7,613,368,850	856.04
合 計	129,636,350,838	122,981,342,783	6,655,008,055	5.41
人 件 費	52,967,369,280	54,368,653,579	△ 1,401,284,299	△ 2.58
物 件 費	50,530,341,268	48,485,334,289	2,045,006,979	4.22
施 設 費	26,138,640,290	20,127,354,915	6,011,285,375	29.87

※平成13年度予算補正2号限り

公開講座

ウイルス研究所学術講演会

1. 日 時：9月30日（火） 13：00～17：00
2. 場 所：京大会館101号室（京都市左京区吉田河原町15-9 TEL 751-8311）
3. 演題及び講師：

生体防御因子チオレドキシンによる探索医療	医学部附属病院探索医療研究センター 中村 肇
HIV の耐性発現の分子機構と侵入阻害剤	熊本大学大学院医学薬学研究部 満屋 裕明
ヒストンメチル化修飾と転写制御	ウイルス研究所 眞貝 洋一
Mono-allelic expression of the murine odorant receptor genes	東京大学大学院理学系研究科 坂野 仁
4. 受 講 料：無料（申込不要）
5. 問い合わせ先：ウイルス研究所庶務掛 TEL 751-4003
詳細はホームページをご覧ください。
<http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/virus-public.html>

第10回化学研究所公開講演会

1. 日 時：10月4日（土） 14：30～16：10
2. 場 所：宇治キャンパス 化学研究所共同研究棟大セミナー室
※「宇治キャンパス公開2003」と同期日開催
3. 演題及び講師：

「生物の体温：分子生物学からのアプローチ」	教 授 梅田 真郷
「有機合成化学者の役割：新しい分子を創る」	教 授 玉尾 皓平
4. 対 象：学生、一般不問
5. 受 講 料：無料（申込不要）
6. 問い合わせ先：宇治地区事務部研究協力課研究協力掛 TEL 0774-38-3353
E-mail: kenkyo@uji.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
<http://molbio.kuicr.kyoto-u.ac.jp/koukai.htm>

農学研究科附属農場創立75周年記念第7回公開講座 「附属農場における研究の最先端」

1. 日 時：11月1日（土）及び11月2日（日）の2日間
2. 場 所：農学研究科附属農場 本館 2階 講義室（高槻市八丁畷町12-1）
3. 演題及び講師：
 - 11月1日（土）
 - 10：00～12：00
「温暖化と日本のイネ」 農学研究科附属農場助手 松井 勤
 - 13：30～15：30
「植物の自家受精を防ぐ仕組み」 農学研究科附属農場助手 羽生 剛
 - 11月2日（日）
 - 10：00～12：00
「植物の形にみられる規則性」 農学研究科附属農場助手 札埜 高志
 - 13：30～15：30
「動く遺伝子と生物の進化」 農学研究科助教授 奥本 裕
4. 定 員：各日40名（応募多数の時は抽選になります）
5. 参 加 費 用：無料
6. 申 込 方 法：往復葉書で下記の問い合わせ先に郵便番号・住所・氏名・電話番号（昼間連絡可能なもの）・ファックス番号・希望の講演日・男女・年齢を記入のうえ、申し込んでください。なお、昼食は各自でご用意ください。
10月17日（金）申込締め切り（必着）。
可否は10月23日（木）以後葉書で連絡します。
7. 問い合わせ先：京都大学大学院農学研究科附属農場事務室
〒569-0096 高槻市八丁畷町12-1
TEL 072-685-0134 FAX 072-683-1532
詳細は農学研究科附属農場ホームページをご覧ください。
<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/farm/>

お知らせ

宇治キャンパス公開 2003
—人類の生存基盤を探究する情報科学—

総合展示

日 時：10月3日（金） 13：00～16：30

10月4日（土） 9：30～16：30

場 所：化学研究所 共同研究棟1階

公開ラボ

日 時：10月3日（金） 13：00～16：30

10月4日（土） 9：30～16：30

場 所：宇治キャンパス内の各研究所・センター・研究科の施設及び

防災研究所宇治川オープンラボラトリー

備 考：公開の日時は、プログラムにより確認願います。

公開講演会

日 時：10月4日（土） 10：00～12：00

場 所：化学研究所 共同研究棟1階大セミナー室

定 員：250名

参加費用：無料

「生命の理解を目指す情報科学～バイオインフォマティクス～」 化学研究所 助教授 五斗 進

「コンピュータでみる地図—地理情報システム（GIS）」 防災研究所 助 手 畑山 満則

「計算が拓く宇宙科学の明日」 宙空電波科学研究センター 教 授 大村 善治

主 催 京都大学宇治キャンパス公開2003実行委員会

問い合わせ先 宇治地区事務部研究協力課研究協力掛

E-mail: kenkyo@uji.kyoto-u.ac.jp TEL : 0774-38-3353 FAX : 0774-38-3399

詳細はホームページをご覧ください

<http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/open-campus/open-campus.htm>

農学部創立80周年記念シンポジウム 「人類の未来と農学の可能性」 ―世界のフィールドから―

1. 日 時：10月4日（土）13：00～17：00

2. 場 所：国立京都国際会館 アネックスホール

3. プ ロ グ ラ ム：基調講演「グローバル化に翻弄される途上国農業」

駐ザンビア日本大使・前東京大学大学院教授 石 弘之

「アジア・アフリカの天水田・焼畑稲作の村でのフィールド研究から」

教 授 堀江 武

「エコ・フレンドリーな食料生産とはいったい何か？」

教 授 小崎 隆

「薄く不安定な世界のコメ市場とコメ政策のあり方」

教 授 辻井 博

パネルディスカッション

4. 参 加 費 用：無料

5. 問い合わせ先：農学部等総務課庶務掛 TEL 753-6004

詳細は農学研究科ホームページをご覧ください。

http://www.kais.kyoto-u.ac.jp/kais_jap/80symposium/index.htm

フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地 一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」

1. 日 時：11月22日（土）10：00～15：00（雨天決行）

2. 場 所：フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地（京都市北区上賀茂本山2）

3. 定 員：50人（申込多数の場合は抽選）

4. 参 加 費 用：無料

5. 申 込 方 法：往復はがきに住所、氏名、年齢、電話番号を記入の上、お送りください。

6. 申 込 締 切 日：10月24日（金）《必着》

7. 問い合わせ先：京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地

TEL：781-2404 FAX：723-1262

E-mail：kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp

詳細はホームページをご覧ください。

<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/>

平成15年度原子炉実験所学術公開日について

原子炉実験所では、平成15年度下半期分の学術公開（施設公開）を以下のとおり実施します。

1. 日 時：平成15年10月6日（月）
11月10日（月） 時間は各日とも
12月1日（月） 13：00～16：00
平成16年1月5日（月）
2月2日（月）
3月1日（月）
2. 申 込 方 法：希望日の前々週の水曜日までに団体名、人数、責任者及び連絡先をご記入のうえお申し込みください。
(郵送, FAX, E-mail, いずれも可)
3. 問い合わせ先：〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町野田
京都大学原子炉実験所 総務課庶務掛
TEL：0724-51-2310 FAX：0724-51-2600
E-mail: shomu@rri.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
http://www-j.rri.kyoto-u.ac.jp/koukai/g_kokai.htm

編集後記

この春から京大広報の編集に携わらせて頂いている。偶然ではあるがこれに加え、今年は私が所属する部局の親睦団体の雑誌部で会誌の編集を、また私的なことで恐縮だが、町内の自治会で会報の編集を行うことになり妙に編集づいていく。こういった編集には、締切りというものが付きまとう。「京大広報」でも「・・・先生からはすでに原稿をいただいている。」という安堵感が広がる。私自身会誌の原稿を依頼して、それが締切りまでの期日が余りない場合でも、ちゃんと原稿を返していただける人は神様のように見える。一方、かなりの時間的余裕があるにもかかわらず、原稿が返ってこないときもある。その時は、「忙しくて忘れていたのだろうか?」、それとも「もしかして、締切り破りの常習者では?」など、執筆者の顔を思い浮かべながら勝手なことを想像してしまう。いずれにせよ、督促のメールなりをするわけだが、このタイミングというのが結構難しい。締切日の翌日にすぐというのは、特に目上の方やえらい方の場合、いささかやりにくい。そこで私の場合、特に理由はないが締切り後3日を目安にやんわりと督促をお願いしている。実を言うと、この「編集後記」も締め切りを過ぎていた。そろそろ督促が来るのではないかと思った矢先、新着メールのお知らせ。やはり担当からの督促メールであった。日曜を挟んではいるものの、なんと締切りの5日後であった。「担当の皆さん、どうも申し訳ありませんでした。」

(飯田記)